

【合格体験追記】～Kくんの言葉を引用しながら～

センター試験の2ヶ月前のある日…。

「ぼくは受験パンクなんですよ」(Kくん)

「受験パンクってなんなん？」(私)

「勉強しすぎて勉強のことばかり考えてしまう精神状態ですかね」

「そんなに勉強しとるん？」

「毎日午前3時に起きて勉強しているんですが、眠いので外に止めた自転車をこぎながら地理のノートを暗記したら、お父さんが起きてきて『お前、こんな朝っぱら何しよんなら。頭がおかしいぞ』って。こんなんが受験パンクです」

「受験が終わったら、そのパンク、修理せんといけんね」

大学入試は、1年、2年と時間をかけて受験勉強すれば、誰でも80%程度はとれてしまう。

問題は時間をかけずに、つまり数ヶ月で80%をいかにとるか。

そして、80%とれるかどうかを実感できているのは本人だけなんだ、と私は思う。

Kくんは高校3年間の学習内容を1年間に詰め込もうとした。

そして、自分が80%に届かないことがわかっていて。

だから、80%とるために試行錯誤を繰り返した。

さらに、長時間の勉強に耐えた。

「いま企画をやっているんです。人間は一日に何時間勉強できるか」

「ぼくには中学のときに16時間という記録があるなあ。大学受験前は平日で6時間

土日は12時間前後だったかなあ」(私)

「朝3時から勉強始めたので、いま10時間。塾で2時間。行き帰りの電車で計1時間。帰宅して3時までやります」
後日、一日の勉強時間20時間という記録を打ち立てたと聞いた。

ところで、私がKくんに贈りたい言葉は「ぶったまげた」だ。

人をこんなふうに表示することは一生のうちに何度あるだろう？

「最も悪いときは360人中の350位だった」という。

確かに、2年秋、塾にやってきたとき、平方完成や二次関数の一連の問題が理解できていないようだった。

あの状態から1年後に記述模試2位(偏差値74)の結果を見せられたときには一瞬、「これ誰の？」って思った。

「自分は形やパターンで考える傾向があるので、柔軟さが求められる問題には弱い」

確かに、どの科目も、特に数学はパターンで考えていた。

ただ、Kくんはこだわりが強かった。

「これがよくわからんわあ」

基本的なことでも「自分はわかっていない」とわかっていた。

そこにこだわりがあった。

そして、それを理解するために猛烈に練習した。

また、友人たちに教えてもらってもいた。

能力？性格？夢？成績？見栄？……うーん、全部関係ない。

一点突破あるのみ。

目の前にできない科目があり、できない問題がある。

その事実がある。

その現実を受け止め、それをひっくり返す。
そこにこだわる。
パンクするほど。
こいでこいでこぎまくる。
圧倒的な努力の前に、現実が白旗をあげてしまった。
そういう表現がぴったりだ。

結果は、センター試験は652点だった。
そして、二次試験を突破して岡山大学に進んだ。

◆勉強論（総論）

学問に王道なし。
学問に安直に習得できる近道というものはない、という意味だ。
でも、試験で80%得点することは学問じゃない。
また、「王道がない」と言っているのであって、「道がない」とは言っていない。
短期間で80%得点するための道（方法）はある。
私はそう考えている。
では、その道はどんなものなのか？
逆説的に聞こえるかもしれないけど、「王道でない」道。
地道にやること。
では、何をやるのか。
薄い問題集を一冊。
理想は100ページから150ページ。
それだけ。それだけでいい。
ただし、条件がある。
隅から隅まで。
最低でも10回以上。できれば20回。
書き込みやメモの貼り付け。
定期テストや実力考査、模試でできなかった問題の解決方法もチェックするか、記しておく。

「センター物理は、『物理のエッセンス』（河合塾）だけしかしなかったのに81点。何度も繰り返しただけ。
結局、それがセンター試験の勉強法なんだなと思いますよ」。センター受験後のKくんの言葉。
まったくその通り。

1年前の春、物理エッセンスの例題と問題だけをコピーしたノート型問題集を作成してKくんに渡した。
全部で40ページ。
この40ページに気づいたこと、模試問題の解決法、公式などを書き込み充実させていく。
おそらくセンター直前だと、1時間で全ページを見直せるほどだったと思う。

「今日の内職はユメタンでした。45分授業で1000語全部をちょうど見直せる感じですね」
先生には嫌がられるだろうけど、Kくんは授業中に内職をしていた。

『ユメタン』は英単語集（アルク）。293ページ。
どうだろう、45分で見直しができるだろうか？

でも、岡大や難関大を目指す人はそのレベルの単語力が必要になる。

このスピード感はKくんに限ったことではない。

私自身が高校時代に体験したことだ。

生物と化学で『傾向と対策』という当時120ページ程度の問題集1冊だけを使用した。

回数をこなすたびに成績グングン上がった。

そのときに「これが試験勉強だ」と気づいた。

おそらく、共通一次試験（センター試験の前身）までに20回は繰り返した。

もちろん、やり方は多様。

例題コース、問題コース、ミスした問題コース、解説コース、メモ用紙・書き込み・解説コース、全問コース。

最終的に全問コース（隅から隅まで）でも30分程度で終わらせることができていた。

この「王道でない」道こそが、受験勉強の真の道だと確信している。

◆学校

通学時間も考慮すると、生徒は一日の半分以上を学校関連で過ごす。

AO入試や推薦入試を目指すなら、3年1学期までは学校重視でよいと思う。

私自身は受験は学校の勉強で事足りた。

もちろん、学校の勉強だけしたわけではなく、

世界史、日本史、生物、化学は前述のように自主的に入試対策の勉強した（当時は5教科7科目1000点満点）。

英語と数学は、好きな科目ということもあり、普段から勉強していた。

よって、英語と数学は学校の授業だけで十分だった。

当時と今は異なる。

大きな違いは当時は生徒の自主性に任せる領域が大きかった。

まず、ノートや問題集などを先生に提出するというのもなく、勉強は生徒任せだった。

だから、私の場合、英語と数学は勉強の意識が入試型で、普段の勉強から入試対策のような勉強していたように思う。

具体的には、英語の長文読解は予習の段階から単語を調べ、頭の中で訳し、心の中で3回程度音読する。

そして、授業で英文の訳や文法、構文、趣旨などを確かめる。必要な時以外は訳は書かなかった。

気づいたことや先生の説明は全部教科書に書き込んだ。

この勉強法は私に合っていた。

考査前にはまた2~3回訳し、単語や連語や先生が話したことを確認していた。

数学でも、先生が『スタンダード』という問題集（いまでいう『クリア』）を何度もテストした。

だから、自然に同じ問題を繰り返し解いた。

できない問題は解き方を覚えようとしていた。

考査前にはイメージトレーニングで、出題範囲の全問題を頭の中で解けるようにしていた。

50問程度なら2時間ほどですべて見直していた。

理解と言うのは不思議なものだ。

そのときは理解できなくても、他の分野の知識や経験が蓄積されると思いがけずふっと降りてくる。

自転車に乗れるようになるとき、鉄棒の逆上がりができるときに似ている。

受験生は7月からは主体的に勉強する必要がある。

自分の勉強を進めなければならない。

1 学期のKくんの話。

「数Ⅲ 0 点でした。内職ばかりやってたので、まあ予想通りです」

「それで留年ってことはないん？」

「次からは数Ⅱの範囲からも出題するということなので、0 点ということはなくなるので、大丈夫です」

「それならいいけど…」

「ぼくの場合、経済学部志望なので数Ⅲ数Cはいらないんですよ。だから、数Ⅲ数Cに時間はⅡBをやっているんです」

「なるほどなあ」

1 学期から内職していたが、2 学期にはさらに受験に不要な科目はほぼすべて内職状態だったと推測している。

さらに、不要な科目が多い日は学校を休み始めた。

「先生が同じ話を何度もするんですよ。それが受験に関係あればいいけど、

どこかに旅行した話で、もう5 回くらい聞いたんです」

「学校休んだら先生に何か言われんの？」

「そりゃ言われますよ。電話してきて

『お前、なんで学校に来んのんか？ずるやろ？このままじゃあ、お前と卒業式で肩を叩きあって喜べんやないか』と言うんで、

学校に遅れてきましたよ。熱い先生なんです。言っていることはわかるけど、自分は大学に合格できんかったら、

そのほうが肩を叩き合う気持ちになれないと思うんですよね」

担任との面談の話もしてくれた。

『私立はどうするつもりだ』って聞かれたんで、『私立は行かないと思う』と言うと、『明治でもしとく？』って。

だから、書類上は一応明治も志望していることになりました」

結局、Kくんは2 学期の3 分の1、3 学期は模試の日を除いてほぼ学校を休んで家で勉強していたのではないかと思う。

先生も何も言わなくなったという。

ところで、学校の先生はどのような気持ちで授業をしているのだろうか？

先生は生徒が目標を達成することを一番に考えていると思う。

そのために良かれと思うことを実践しているはずだ。

しかし、私には、受験期の授業には改善点があるように感じられる。

受験期には、模擬試験が繰り返され、宿題や新しい問題集、プリントが大量に渡される。

その意図がよくわからない。

生徒は自分の弱点を把握している、また把握しなければならない。

本当に弱点を知っているのは生徒自身なのだから、どうしても生徒の自主性が必要になる。

その自主性をサポートできる授業や宿題が受験期の授業であるべきだ。

復習をしにくい授業形式では、生徒は実力を最大限に伸ばしきれないのではないだろうか。

1 0 0 ページの問題集でさえ、隅から隅までやろうと思えば、1 ヶ月はかかるだろう。

2 回目の復習に毎日やっても2 週間。それを1 0 回やろうと思えば、がんばっても3 ヶ月はかかってしまう。

受験は、できない部分を見つけ、そこを理解し、暗記し、解き直し、格闘して自分のものにする作業の繰り返し。

学校の授業はその作業をサポートしてほしい。

Kくんは1 2 月初旬にこんなことを言い出した。

「センターの英語長文対策として2 年生でやった『プロミネンス』という教科書をもう一度やってほしい」

そこで、5回分の授業を使って全170ページをすべて訳した。
以後、この教科書の音読を何度も繰り返していると言っていた。
このころから「長文がより深く読めるようになった」と言っていた。

◆数学（各論＝塾でやったこと）

志田晶『面白いほど100まで』のIA編、II B編をそれぞれノート形式の問題集にした（各25ページほど）。
この問題集をひたすら解いた。夏までに2回通り。それ以降も基本はこのノートだった。
最初は1ヶ月ほどかかったが、秋には1週間、入試前には4、5日で終わらせた。
冬の授業ではポイントを押さえ、難しい問題だけ実際に解いてもらうやり方で1時間で10問から15問のペース。
もし生徒自身が自分で復習すれば、1時間で20～30問のペースだと思う。
また、確率、ベクトル、数列、三角関数など分野ごとにも何度も繰り返した。

さらに、復習の合間に模試問題集と過去問を解いた。計100問くらいにはなったと思う。
この過去問、模試問題も重要問題や難しい問題は2、3回解きなおした。

◆英語

エスト出版「英文法語法問題 最頻出ファイル」をノート問題集にし、5～6回復習した。
英語に関することはすべてこのノートに書き込もうという意図だった。
特に文法・語法・構文・アクセント・発音で気づいたことは表紙も含めて余白にメモし、
復習の機会にメモにも目を通せるようにした。

ユメタンI。最初はこの単語集を生徒に尋ねながら2回通り終わらせた。2年秋から3年初めが中心。
この本は学校の教材でも使用されていて、定期考査に出題されていたので、やっておく必要があった。
また、3年1学期までは定期考査対策としてテスト範囲の教科書で英文、英作、文法などを必ず1回通りは見直した。

長文（センター3、4、5、6問）対策として、過去問、模試過去問問題集を適宜やった。
特に速く読むこと、読解時に心がけること、設問のポイントなど問題を解きながら研究した。

前述のように、プロミネンス（教科書）を読んだ。これは定期考査のたびに読解していたので、
170ページのうち4分の3程度は学校でやり、塾でもやった内容だったので、単語や文法、構文、語法の
チェックができたように思う。これは効果的だったと思っている。

◆国語

自信がないという生徒が多かった。私自身、国語をやるべきかどうか迷った。高校時代に勉強の仕方がよくわからず
当時は苦手意識がある科目だった。ただ、自分なりに試行錯誤して、見えてきたこともあった。
また、大学で社会学を学び、本を読み、新聞記者として社会経験を積んだことで、自分の中にある問題意識と
センター試験の素材となる評論や小説の筆者の問題意識が重なってきたせいも、センター国語の正答率が高くなっていた。
そこで、国語のセンスに磨きをかけることはできるだろうと、12月から国語の過去問、模試過去問問題集をやった。
また、直前期には古文単語、文法、漢文単語、構文などをチェックした。
普段の練習では、生徒たちは60%から85%程度の得点率だった。
私から見ると、生徒たちはは国語的なセンスがかなり研ぎ澄まされていた。
しかし、センター本試験では結果が出なかった。

2014年のセンター国語は満点なし、平均点が98点と、とても難しい内容の試験だった。

センター試験国語をKくんが語った。

「古文、漢文、評論、小説という順番で解くことにしているんですが、古文・漢文が半端なく難しいんですよ。それでも、まあ何とか、古文、漢文終わらせて、評論やって、小説に入ったんですが、読んでも読んでも終わらない。小説の本文だけで8ページもあったんです。途中、時間がないので問題に関係ないページは読まないで飛ばしました。結果的に、古文はまずまず、漢文でやられまして、現代文はボチボチで、97点(200満点中)。えらいもんでしたわー」Kくんの97点という結果を聞いたときには、一瞬、「岡山大学を受験できるだろうか」と心配になった。Kくんによると、「一応、自己採点で652点なので、まあまあよかったです。岡大のボーダーを超えていると思うので、岡大二次の勉強を明日から始めます」とのことだった。

また、神戸大学に合格した生徒はセンター国語に関してこう言っていた。

「ぼくは国語は捨ててたんです。だから、古文と漢文の語句とか文法の問題だけ真剣に解いて、あとは適当にマークしたんで、古文漢文を15分で終わらせ、あと全部現代文にかけたんです。そしたら、古文漢文も結構できて、135点くらいありました。作戦がはまったというか、かなりラッキーでした」彼は物理、化学で190、地理80、数学IA85、IB70、国語135、英語120で680点だった。

国語のセンスを磨くことは悪くはなかった。しかし、古文漢文の単語や構文と暗記することも含めて、一連の勉強を夏休みが終わるまでにはすべて終わらせる必要があると感じた。勉強したことを使って失敗や成功を繰り返したという経験がなければ、本当に習得できたとは言えない。難しい問題に出会ったときに、国語の経験値や知識の浸透度の差が出てくると思った。

◆まとめ

私立入試のことと合わせて、もう1人のKくんのことも記しておきたい。

県代表だったこともあり、3年生の10月まで部活を続けた。

コツコツ勉強するタイプだった。

部活引退後に超本気モードに入った。

センターは国語(漢文除く)、英語、地理で約8割だったという。

国学院と駒沢はセンターで合格した。

法政大学は一般入試で挑戦し、社会学部と経済学部合格し、経済学部に進んだ。

内申点が足りなくて推薦はしてもらえなかった。

「先生は東京経済大も難しいって言っていました。まあ、最下位でしたから」

「それって、360人中の360位ってこと？」(私)

「そうです」

「うそやろ？まあ、誰か最下位の人はいるわけだけど…」

「いや本当に360位でした」

ちなみにこの合格体験追記に登場するKくんは、私立はどうだったか。

大手予備校の合否判定では、センター利用で関関同立、明治がA判定だったという。

センターの勉強は私立入試にも活かせる。

センター試験は小手先で太刀打ちできる相手ではない。

ただ、こうも思う。

センター試験は特別に難しい試験じゃない。

この追記で記したようにテーマをもって回数をこなす、つまりトレーニングで克服できるハードルだ。

だから、時間をかければ誰でもできるようになる。

真の学問（未知の領域の開拓）はその先にある。

そこは、トレーニングだけでは克服できない、才能や情熱や思い入れがなければ立ち入れない領域だ。

センター試験は、その前段階、大学進学に立ちはだかる壁だ。

私は、こう思う。

大学進学を目指す生徒たちにとって、この壁がこれまでの人生をかけて突破する価値があるものだと。

もちろん、その成功が人生の成功まで約束するものはないし、失敗してもそれが人の価値や努力を否定するものではない。

ザ・ブルーハーツというバンドに「リンダリンダ」という曲がある。

「ドブネズミみたいに美しくなりたい 写真には写らない美しさがあるから …」と始まる。

失敗はそのときは悲しくつらいけど、きっと人生に複雑な模様を作り上げ、深みを増していくのだろう。

それは時に美しくもある。

何かに一心不乱に打ち込んだという経験は宝物になる。

それだけで生きる支えになる。

1ヶ月、2ヶ月、3ヶ月…、暑い日、寒い日、雨の日…、毎日6時間、7時間、8時間と勉強する。

そんな自分を想像してみる。

疑問も湧くはずだ。自分は何のために勉強しているのか？

勉強しない日があると、自分を情けなく思うだろう。

でも自分を責める暇はない。情けなさを勉強しない言い訳にはできない。

どんなことがあっても勉強を続ける。前進する。

覚悟を決めて、ゴールを目指す。

人は選択肢があるときに迷うのではない。

一本道しかないと感じる時、行くか戻るか迷うのだ。そして、もう進み出している。

受験勉強は習慣ではない。

習慣になるほど楽しいものではない。

が、自分に出会える。

誰もが寝静まった夜、スタンドだけが明るい部屋。

勉強の合間に温かいココアを飲んでいる。

そんな瞬間に、「自分は何者か」という哲学的な問いに答えられそうな気がする。

多くの場合、受験勉強は高校卒業と同時に終わってしまう。

しかし、そこで出会った哲学的な自分はきっとリアルな世界を生きる自分を支えてくれる。

学校の外で、時代は速く流れ、社会は大きく変容している。

何のために勉強するのか。

この受験勉強を走り終わったとき、雲の切れ間から青空がのぞくようにその答えが見えたらいいなと思う。